

# 外国語教授法について

—2007年度 JCLP(日本文化・日本語プログラム)に参加して考えること—

04L005 榎 あさみ

## 1. はじめに

私は、これまで外国語を学ぶ際、絶対に直接法<sup>(1)</sup>で教えてもらいたいと思っていた。実際、大学に入学して、ネイティブスピーカーの先生から英語を直接法で学んだことにより、驚くほど身につけている。この経験を通して、外国語習得にはネイティブから直接法で教わるのが一番だと考えていた。そのほうが実践にも役に立ち、発音やアクセントの置き方などをきちんと学べるからである。

しかし、この直接法がすべての場合でよいかといえば、必ずしもそうではないことに気がついた。それは、私が今年、JCLP(日本文化・日本語研修プログラム)で1ヶ月間本学を訪れた留学生の授業にアシスタントとして参加したからだ。日本語教育に関心のある私にとってはとても興味深い体験となり、日本語教育の現状、そして、日本語教師の難しさを学んだ。

このレポートでは、この体験をふまえてJCLPの日本語レッスンを例に挙げ、主として媒介語の有無に焦点を絞り、外国語教授法について考えてみようと思う。

## 2. 外国語教授法について

外国語教授法は、媒介語の使用の有無によって大きく2つに分けられる。まず1つは、媒介語を用いて外国語を学ぶ文法翻訳法<sup>(2)</sup>、そしてもうひとつが、学習する外国語そのものだけを使って学ぶ直接法である。

文法翻訳法は、例として日本人が英語を教える、あるいは学習する場合の典型的教授法とも言える。先に文字の種類や文法の仕組みを学び、意味をしっかりと教え、できるだけ日本語に完璧に訳すという方法だ。会話よりも、文法を理解や読み書きが正確にできるようにという目的が主で、口語能力等については実用的とは言いがたい。これは19世紀後半のドイツのPlotzによって理論化された方法である(リヴァーズ1987:29)。当時、ヨーロッパでは言語の学習において実用的な口頭・聴解能力よりも、単語や表現を暗記して自分の言語に確実に翻訳できるようになること、すなわち、読解能力の伸長と内容把握が大切であると考えられていた。先に述べたように文法翻訳法は文章や単語を正確に訳すことを重視した机に向かって学習するというスタイルであり、正しい発音や日常的な言語の使い方についてはほとんど学習する機会はない。聞き取りや実際の運用を訓練しないため、どんなに文法や単語の語彙力を増やし学習していても、実践になると適切に運用できなくなってしまう。言いたいことは頭の中でできていても、それを文法どおりに並べてから話そうとするため、混乱して逆に文法的な知識が邪魔をしてしまう。日本では長年、主としてこの方法で英語教育を行ってきても、どんなに勉強してもスムーズな英会話ができないのはこの教授法のためとも言われる。

しかし、文法翻訳法が全般的に悪いという訳ではない。実用的な部分を考えると使い勝手はよくないが、文法教育の観点から見ると非常によい方法と言える。そして、講義形式によって教師の一方的な説明で行うため、

集団教育や学校教育には適している。加えて、媒介語を使うことによって、日本での英語教育の場合を考えても、教師が教えやすいというメリットがある。

この文法翻訳法を批判して開発されたのが、直接法である。直接法は、近年の日本における英語教育でも使われ始め、また国内で行う日本語教育の主流となっている。音声学的教授法<sup>(3)</sup>と心理学的教授法<sup>(4)</sup>を取り入れ、より体系的になったものが直接法となっている(縫部 2001)。媒介語を使わずに目標言語そのものを使うことにより、口頭表現や聴解能力などの実用的な部分を重視し、実際の場面で外国語を使えるようにすることが目的である。実際に発音を生で聞くことにより正しい発音を身につけられ、どのような状況で使うのかということその場で理解できる。紙とペンと辞書だけの文法翻訳法と異なり、「今」の生きた言語を知ることができる。

しかし、いくつか問題点はある。まず1つに、学習者が外国語をそのまま理解できる程のレベルでなければ、直接法で教えても理解できないということである。たとえば、日本語の授業で「東京は日本の首都です」という説明を学習者に直接法で教えた場合、「東京・日本・首都」という言葉を理解していなければこの文章はわからない。そして、その意味を日本語で説明することが難しい。つまり、この教授法は日本語がある程度のレベルに達していて且つそれなりの会話が理解できる学習者ならばよいが、運用レベルの低い学習者にとっては、理解できない部分がたくさんあり不安要素が多いのだ。また、耳で覚えたり、自分の体を実際に動かして学習させたりするので、教師は十分な準備やそのための配慮が必要になる。外国語のレベルが低ければ低いほど、ゲームやクイズを通して印象づけて覚えやすくしなければならぬため、準備のために多くの時間も必要になる。

この2つの教授法を比較すると、どちらも良い・悪い部分があり、一概にどちらが適切かを断定することはできない。では、JCLPでの実際の授業を見てみよう。

### 3. 学習経験がゼロ、もしくは学習レベルが基礎の場合

2007年の5月から、アメリカからの留学生がやってきた。彼らは日本に興味があるが、日本語学習経験はゼロ、あるいは高校生時代に若干の学習経験があり、ひらがなは読めて簡単な挨拶ができるレベルの学生がほとんどだった。彼らに日本語を教える先生は、W先生とY先生の2人である。どちらも日本人であり、W先生は学習者の言語である英語を話し、英語を媒介語として多用し教えていた。一方、Y先生は英語を話さないため、必然的に直接法で日本語を教えることとなる。

それぞれの先生がたの授業を紹介する。

#### ● W先生の場合

学習者の日本語のレベルはおおよそゼロであると判断して、先生は彼らの母語である媒介語の英語を使って日本語を教授した。あいいうえおの発音の方法や文章の意味、日本語の言葉の意味などをすべて学習者の母語で説明し、講義を行う。しかし、W先生の場合は媒介語を使って教授するが、文法翻訳法ではない。媒介語を多用するが、教える内容は文法中心ではなく、日本語の挨拶や会話に役に立つ実用的な表現である。

まず、発音の仕方(例:がっこう・・・{っ})の発音は一拍間を置く/えいが・・・{えい が}ではなく{えーが}と発音する等々)なども全て英語で教えることによって学習者もきちんと理解できていたように思う。しかし、日本語1つ1つ、文章も含めて日本語で言った後かならず英語でそれに相当する意味を教えるため、学習者は日本語そのものではなく、どうしても日本語を英語の翻訳として理解してしまったのではないかと。そうは言うものの、私も彼らに単語を聞かれて教える際、手紙はletter、朝ごはんはbreakfast・・・という

ように、媒介語を通して説明せざるを得なかった。つまり、単語レベルで考えると、説明が難しい単語は媒介語で訳してしまえば、学習者はたちどころに理解し効率的だという点もあることに気がついた。また、外国人学習者向けに字幕が表記された日本語教育用教材を使用して、郵便局での買い物や自己紹介のビデオを見て、その後私たち日本人と一緒に実践練習を行うという授業形式もあった。映像がありわかりやすく、実践練習では皆が打ち解けて和やかな雰囲気だった。

しかし、教師の説明が多いときには、学習者は集中力が欠け、他の事を始めたり、途中で居眠りをしてしまう学生もいたので、教師にとっても学習者にとってもあまり楽しいものではないように感じた。そして、媒介語を使用した授業は、私たち日本人アシスタントにとっては外国人に対する媒介語での教授法について体感して学ぶことができ有益だったが、学習者にとっては日本語を学習しても結局は英語で理解してしまっているのも、実用的な語彙や表現が身につけにくい面もあるのでないかと感じた。

#### ● Y先生の場合

先に述べたようにY先生は対照的に媒介語を使わず、直接法で彼らに日本語を教えた。教授形態も講義スタイルのW先生と異なり、学習者参加型のゲームやクイズ、日本語の歌などを通して授業を行っていた。直接法なので、先生の話し方はゆっくり、はっきりと発音する。しかし、学習者が先生の話す日本語を十分に理解していないため、何人かの学習者は私たちが英語を使用して先生の話す日本語を十分に理解して、ようやく理解するという場面もあった。教える内容は、数字の教え方、ここ・そこ・あそこ・どこなどの所在の表現、そして、家具や身の回りの単語など、実用的な会話に使える日本語の知識を増やすための学習といえる。先生はジェスチャーや身振り手振り、そして、実際に自分がその動作をやってみせて授業を行っていた。学習者よりも先生が多大な体力を必要とし、教師にとっては大変な方法であると感じた。また、顔のパーツの語彙導入では、福笑いをを用いて、学生が楽しめるように工夫をしていたが、そんなアイデアや準備が大変だろうと思った。

このようにY先生の直接法の授業は、生徒も教師もあまり退屈せずリラックスした雰囲気のなかで学習を進めることができるため、生徒と教師の間にも信頼関係が生まれてとてもよい雰囲気を作ることができる。しかし、Y先生のような直接法を行うとなれば、教師はやはりこのための準備に大変な時間と労力がかかる。そのため、Y先生は授業の際は持参する教材や資料などで多くの鞆を抱えてやってくる。ゼロレベルの学習者にとっては直接法の方が実際に自分で運用できるので、習得速度は速いかもしれないが、教師の立場では、準備が大変だということが難点である。また、私たちのような母語に翻訳するアシスタントがいない場合、完全な直接法の授業では、学習者の理解が中途半端になってしまったり不安を引き起こしたりする可能性もあることを実感した。

## 4. 学習経験がある、もしくは日常会話が問題なくできるレベルの場合

6月からは、アメリカ・スウェーデン・中国から留学生がやってきた。彼らは自国でそれぞれ何年か日本語を勉強していた。学校で第二言語として日本語を学んだ学生や自分で家庭教師をつけて学習する人など、学習方法や経験はそれぞれだったが、いずれも直接法ではなく、文法翻訳法あるいは媒介語を使って日本語を学習してきたという。スウェーデンのある学生は「僕の日本語の先生はスウェーデン人だけど、日本での生活経験がある先生だ」と言っていた。彼の日本語の発音はとてもきれいで、外国人の特有の癖や発音の方法など、私には大きく気になるようなものはなかった。しかし、中国からの学生は、媒介語を通して中国人教師から日本語を学習してきたと言い、そのためか発音やアクセントに独特なものがあるように感じた。

### ● W先生の場合

前回のアメリカ人の学生と異なり、今回は日本語がある程度のレベルなので、先生は直接法で授業を行った。授業内容は日本の地理や気候について、教科書を使って実際に読み、書いたり、自分で文章を作ったりする読み書きが中心の授業だ。ここでも先生主導の授業で、先生が学生を指名して提示された問題に生徒が答えると言う講義形式だった。そのような授業スタイルのためか、教科書の他に宿題用ドリルが出されていたが、宿題に指定されていなくても自分で勝手にやり始める学生や隣の人と話を始める学生もいた。私も前回同様日本語アシスタントとして参加したが、彼らは学習経験があり、ある程度語彙力があるため、前回と比較すると媒介語(今回も英語を使用した)を多用することもなく、彼らは先生の言っていることを大体理解していた。だから、逆に私たちはアシスタントとしての仕事がなく、留学生の隣に座ってただ見ているだけということも多かった。テーマが日本の地理や気候というもので、私たちにとっても少し難しいものだったため、答えられないときもあり、自分の力の無さを思い知らされた。先生も難しい単語にだけ英語の説明を付け加えるときがあったが、基本的にはY先生と同様にゆっくりはっきりと日本語で授業をすすめるので、学習者にとっては理解しやすかったと思う。しかし、テキストの内容がつまらないという声をスウェーデン人の学生から何人か聞き、それは少し残念だった。しかし、つまらないという学生がいる反面、真剣に取り組んでいる学生もいたため、テキストの内容の是非について、私にはなんとも判断ができない。最後の授業では、みんなで日本に関するゲームをしながらすころくを進めて行き、あがりが出るまで時間がかかったが、クイズの内容が今まで彼らが学習してきたことを総合するような内容だったため、彼らにとってもよい勉強になり、楽しそうだった。授業の終わりには一人一人日本語でスピーチを行い、自分が習った言葉を一生懸命使おうと頑張っている姿を見て、W先生はとても感動していた。また、俳句を作った留学生もいて、彼らの短期間での日本語運用力の伸長に、私もとても驚いた。

### ● Y先生の場合

前回同様、さまざまなゲームを用いての授業も行ったが、W先生のように読み書きの授業も平行して行っていた。そしてY先生も、授業にスピーチを取り入れ、より高い日本語の運用能力を身につけさせようとしていた。単語の勉強だけでなく、今回は文法の要素も入れつつ、料理の作り方というテーマで、{～で～をする・次に～}というような表現の学習も行った。最後にはこれらの表現を使って、自分の得意な料理とその作り方のスピーチを行った。彼らは真剣にその課題に取り組み、一生懸命日本語を使おうとする場面が見られた。また、私たちに聞くときも英語だったのが日本語に変わり、進歩が感じられた。このような場面を見ると、やはり直接法の方が上達は早いのではないかと感じた。

Y先生も彼らに対応する際は、単語を黒板に書いて発音をしてあげたり、読み方をローマ字で書いてあげたりすること以外ほとんど直接法での指導だった。特に留学生の中でもスウェーデン人は飲み込みが早く、文章を書いても彼らは辞書を引いたりして漢字をかいていたので、先生も驚いていた。Y先生の授業では、皆がより楽しんでいるように感じた。この授業を通して、同じ直接法でもいろいろな講義形態があり、それによって学習者の意欲が左右される可能性もあると考えた。

## 5. おわりに

今回、JCLPの2つの日本語教授法を体験し、気づいたことをまとめてみたい。

まず、直接法には様々な種類と形があるということであり、ただ日本語を日本語で教えればすべて同じ教授法かという、決してそうではないということだ。そして、レベルにより、場面により、また学習者のニーズにより、必ずしも直接法だけが最善の方法ではないということだ。私はこのレポートの始めに、『外国語を学

ぶ際は絶対に直接法で教えてもらいたい』と述べた。しかし、実際に日本語の授業を目で見て、参加したことにより、その考えは変わりつつある。語学のレベルが低い学習者に直接法で教えても効率は良くなく、学習者を不安にさせるばかりである。しかし、ある程度語学のレベルがある学習者には直接法が良いと思う。そして、語学の基礎を学ぶ際には媒介語を使用しないときちんと理解できないという現状もある。直接法は、あくまで聞く話す、という能力の伸長を考えた場合のみに、有効な方法なのかもしれない。読み書きの指導をすべて直接法でやるとすれば、文法学習に必要な語彙を知っていないと余計に難しくなってしまう。外国語教授法において、聞く話すそして読み書きのどちらとも効果的で、すべての場面で有効な方法はないのではないだろうか。やはり、今まで確立されてきた方法を、学習者のニーズや運用力レベル、そして教授場面を考慮してうまく使い分けするか、あるいは折衷させて教授していくしかないのだろう。

次に、媒介語を使う教授法が必ずしも文法翻訳法ではないこと、しかし、媒介語を使うことによる具体的な問題点も確かにある、ということに気づいた。言語には、必ずしも正確に他言語に訳せないものがある。特に日本語の場合、使う場面や、話しことばか書き言葉かによって大きく言葉遣いが違ってくる。それをだいたいのところで翻訳してしまうと、日本語本来のニュアンスや微妙な違いなどが、学習者にまったく伝わらないということだ。また、今回の JCLP のような場合、教師側にも相当の外国語運用能力が要求される。だが、対象者がすべてアメリカ人であるとか、共通の言語を持っている場合でなければこの方法は利用できない。たとえば、世界各国からの学習者が集まる一般的な地域の日本語教室を考えたとき、今回の JCLP のような共通語がある場合はほとんどなく、媒介語を使用して説明することは不可能だと思う。

そして、最後の点として、完全な直接法を初級段階で用いた場合、学習者の不安感があるだけではなく、教師側の負担が大きすぎるということだ。教育は学習者を主体として考えるべきものであるが、逆に教師の時間や労力などの大きな負担という現実も、直視しなければならぬと思った。

外国語を学ぶ者として、また、将来日本語を教える立場になるかもしれない人間として、今回の体験を契機に、外国語教授法における媒介語の有無の効果について、今後も考え続けていきたいと思っている。また、今回のレポートでは言及できなかったコミュニカティブ・アプローチ、またサイレントウエイや TPR などといった新しい外国語教授法についても、今後さらに理解を深めていきたい。

## 注

- (1) 直接教授法 (Direct Method) ともいう。本文で後述するとおり、外国語を教授する際、媒介語を用いず目標言語のみを使用して教授する方法 (総論 2001)。
- (2) 文法・訳読法 (Grammar-Translation Method) ともいう (総論 2001)。
- (3) 提唱者は H. Sweet、O. Jespersen ら。19 世紀に発達した音声学に基づいた発音記号を用いる教授法 (総論 2001)
- (4) F. Gouin が主に提唱。子供が自然のうちに母語を覚える過程を応用しようとした教授法 (総論 2001)

## 参考文献

- ウィルガ・M. リヴァーズ 『外国語習得のスキルーその教え方ー』第2版 研究社出版 (天満美智子/田近裕子訳) 1987 年  
総論義憲 『日本語教育学入門 改訂版』 歴々社 2001 年  
岡崎雄雄・岡崎暁 『日本語教育における コミュニカティブ・アプローチ』 凡人社 1990 年

(レポート指導教員 有田 佳代子)